

パウロのアテネ伝道

アジアからヨーロッパに渡ったパウロ一行は、フィリピ、テサロニケ、ベレアと進み、イエス・キリストの福音を力強く宣べ伝えていった。こうして各地にキリスト者の群れが誕生した。しかし彼らに対する反対や迫害も激しくなった。彼らがベレアで伝道していたとき、テサロニケの熱狂的ユダヤ教徒たちがベレアまで押し掛けて来て激しい反対運動を展開したため、パウロの身の安全を心配したベレアの信徒たちは、パウロに付き添い、船で彼を安全なアテネまで連れて行った。

アテネ、栄光の時代は去ったとはいえアテネは依然としてローマ帝国最大の学問の都であった。しかし、そのアテネでテモテとシラスを待っている間に、パウロは市内におびただしい偶像があるのを見て、心に激しい憤りを感じた。それは、聖にして至高の神が、知恵を誇る人間の手によって卑しい偶像に変えられていることに対する聖なる怒りであった。

英国の学者 F.F.ブルースは次のように書いている。「今日、私たちはアテネを訪れて、ペリクレス時代の偉大な建築家や彫刻家たちの作品を見るとき、それらを美術品として心おきなく鑑賞する。それらは、今日では何人にとっても、美術品以上のなものでもない。けれども、第1世紀においては、単なる美術品としては見られなかった。それらは異教の神々の神殿であり、偶像であった。・・・異教の神々の神殿偶像は、（パウロにとっては）何も珍しいものではなかったが、このタルソ生まれの人は十戒の第1戒と第2戒の精神で育てられてきていた。パウロは、美術鑑賞という点で何を感じたにせよ、アテネのあちこちを歩いている時、彼の心に真っ先に浮かんだ気持ちは憤りの感情であった」。

そこで彼は、ユダヤ人会堂で福音を伝えただけでなく、連日のように町の広場（アゴラ）に出て行って、そこで出会う人々と毎日論じ合った。その中にはエピクロス派やストア派の哲学者たちもいた。彼らはパウロの語ることに興味を示し、彼をアレオパゴスの評議所に連れて行き、さらに詳しく話しを聞こうとした。使徒パウロはアレオパゴスの知識人の真ん中に立って、天地創造の神から始まり、偶像礼拝の愚かさや罪、人間の罪に対する神の忍耐と愛、神の前における悔い改めの必要性、そして、イエス・キリストの十字架と復活における神の救済のみ業について熱心に語った。

アテネ人の反応は冷たかった。死人のよみがえりのことを聞くと、或る者たちはあざ笑い、また或る者たちは「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言ってパウロの語る福音を受け入れることを拒絶した。嘲笑と拒絶。イエス・キリストの福音に対する人々の態度は今日も変わることがない。

後にパウロはコリントの教会宛の手紙に書いている、「知恵ある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かにされたではないか。世は自分の知恵で神を知ることはできませんでした。それは神の知恵にかなっています。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。ユダヤ人はしるしを求め、ギリシャ人は知恵を探しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えていきます。すなわち、ユダヤ人にはつまづかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシャ人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」（第2コリント 1: 20~25）。

「十字架につけられたキリスト！」。人がどう笑おうと、どう嘲笑しようも、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝える。これが教会の使命であり、キリスト者の使命である。なぜなら、この世が「愚か」と呼び「弱さ」とするまさにその方法で神は人間の罪を贖う道を開かれたからである。